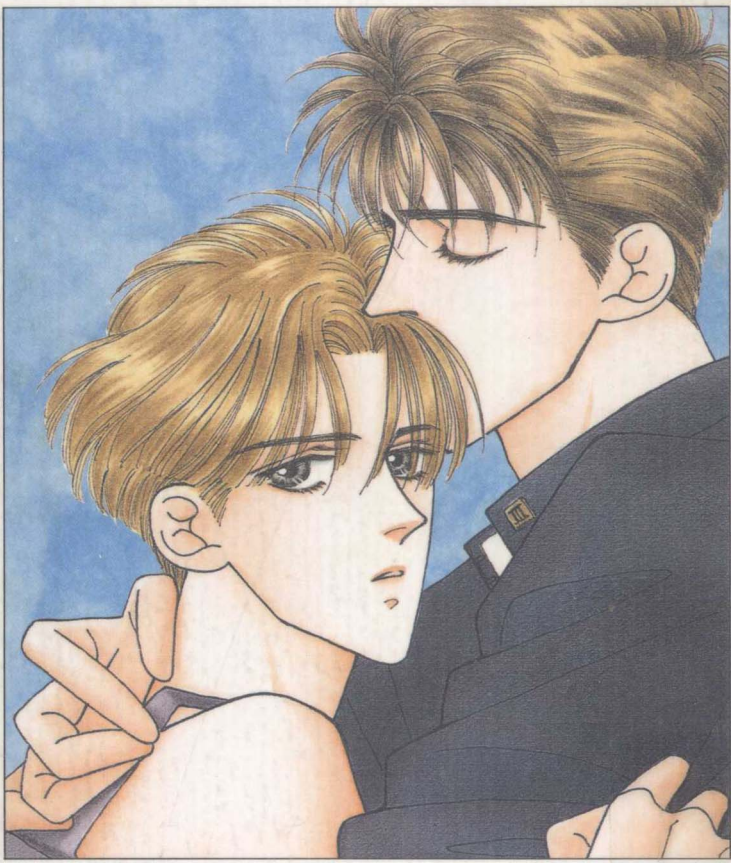
KIRARA NOVELS

いつか夢になる日まで

冬城蒼生 Novel:TAMI FUYUKI
不破慎理 Illustration:SHINRI FUWA



SOMEDAY YOU'LL BE MY DREAM

WANI BOOKS

いつか夢になる日まで
1994年9月15日初版発行

著　者＝冬城蒼生
発行者＝横内正昭
発行所＝ワニブックス
〒150 東京都渋谷区恵比寿4-4-9 えびす大黒ビル
電話 03-5449-2711(代表)
振替 00160-1-157086
印刷所＝集美堂
製本所＝ナショナル製本
ISBN4-8470-3112-1 Printed in Japan 1994

装　画＝不破慎理
装　幀＝関善之＋星野ゆきお for VOLARE inc.

いつか夢になる日まで

SOMEDAY YOU'LL BE MY DREAM

冬城蒼生

第1章　出会いはいつも偶然

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erto

1

高校三年の夏休み――ともなると、世の中真っ暗、夢も希望もないって日々を過ごしているものだ。野崎浩一も、そんなひとりだった。

去年までは、あんなに楽しみにしていた夏休みなのに、たった二日目で浩一はもはやうんざりしている。

「なんだ、野崎も栄進ゼミに来てんのか」

浩一は、夏休みのあいだ通うことにした予備校のロビーで、同じクラスの池田とばったり出会ってしまった。

はっきり言って、ここでは一番会いたくなかった奴だ。池田の銀縁メガネの奥の、どこか人をくったような目を見たとたん、浩一は思わず心のなかで舌打ちをしてしまった。

「ああ、来てて悪かったな」

どこから聞いても不機嫌そうな浩一の声に、池田はニッと笑っただけだ。こういうとこ

ろも、直情型の浩一とは合わない。
この池田という男は、東大一直線、国立でなければ大学ではない、と公言している男である。
毎年、数名の東大合格者をだしている、一応進学校と言われている浩一の高校でも、毎回トップ集団に位置している奴だ。
もちろん、浩一のクラスでは一番。浩一はといえば、かろうじて上位三分の一にしがみついている状態だった。
「一学期は会わなかったよな」
「ああ、この夏季講習が初めてだ」
「ふーん、余裕だね」
浩一が、夏休み前までクラブ活動をしていたことを知っているくせに、なんてイヤミな奴だ。
しかし、考えようによっては三年になってもクラブ活動に精をだしているなんて、他人から見れば、確かに余裕があるように見えるかもしれない。浩一にとっては、単に楽しいクラブを辞めたくないだけだったのだが。
「余裕なんかあるもんか」

それは正直な言葉だったのだが、池田はフッなんてメガネの奥で笑っただけだ。
「早く行かないと、いい席がなくなるぜ」
そう言うと、池田はさっさと階段を上がっていった。
「引き止めたのは、お前だろうがっ」
その後ろ姿に毒づいてみても、気分が晴れるはずもない。
――どうせ俺は、ぎゅうぎゅう詰めに人が押しこめられる「私立理系コース」だ。お前は少数精鋭の「東大理Ⅰコース」だろうよ。だけどな、このふたつのコースには、ひとつだけ共通点があるぞ。それは、どっちにしろ女子が少ないってことだ。
なんて、負け惜しみのようなことを浩一が胸のなかでつぶやいているうちに、あたりが急に静かになっていた。
あわてて、教室の位置を確認しようと案内板へと踵を返し、一歩踏み出したところで、肩に強い衝撃を受けた。
「うわっ……！」
浩一が飲みこんだはずの声が、足元であがった。見下ろした浩一の視線と、尻餅をついた青年の呆けたような視線が絡み合った。
「大丈夫か」

浩一とぶつかって倒れたようなので、とりあえずそう声をかけた。
「あ、ああ…ありがとう」
浩一の差し出した手につかまって立ち上がった青年は、顔を赤らめながら照れたように笑った。
浩一は、青年が倒れた弾みで飛ばしたらしい革のリュックを拾い上げた。たぶん辞書や参考書が入っているのだろう。それは、ずっしりと手に重い。
「ありがとう」
はにかんだように微笑んで、リュックを受け取った青年は、乱れた前髪をさらりとかき上げて浩一を見上げた。彼と浩一の身長差は、たぶん一〇センチちょっと。ちなみに、この三カ月変化していない浩一の身長は、一八四センチである。
立ち上がる前の驚いたような顔からは、ひとつふたつ年上かもしれないと思ったが、もしかすると彼も高三の現役かもしれない、と浩一は思った。それほど、無邪気で無防備な笑顔を浩一に向けている。薄茶色の瞳のなかに、楽しそうに光が踊っていた。
「すごいね、君。僕なんかふっとばされたのに、びくともしてないんだから」
陸上で鍛えたこの身体を見よ、てなもんだ――と、浩一は心のなかで自慢げにポーズをとった。

もし、吹っとばされたのが浩一の方だったら、とても相手にこんな風に話しかけることはできないだろう。浩一は、はっきり言って気が短い。おまけに、体格と体力だけには自信があるのだ。たぶん、プライドが粉々になって憤死寸前になっているだろう。

「あっ、いけない、遅刻だ！」

けたたましいブザーの音が鳴り響くなり、彼は、そう叫んで走りだした。

「君も、急がないと教室に鍵をかけられるよ」

振り返りざまに言うと、転びそうになりながら走っていった。

「あわただしい奴だな……また、どっかでぶつかるんじゃないのか」

呆気にとられながらも、浩一は自分がにやついているのに気づいた。さっきまでの、不愉快な思いが一掃されている。

「……しまった。教室の場所を教えてもらえばよかった」

そう思っても後の祭。カリキュラムを取り出し、教室ナンバーを見る。そして、その教室の位置を案内板で確認し、三〇三教室へたどり着いたときには、すでに遅かった。講師の到着と同時に、教室への出入りは禁止になるのだ。

一時限九〇分授業で、一日三時限。二週間の夏期集中講座の一回目の授業に、浩一は出遅れてしまったことになる。しばらくボケッとドアの前で突っ立っていたが、昼休みをは

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erto

さんで次の授業まで、あと三時間近くもあることになる。
浩一は、小さなため息をついて、ドアの前から立ち去ったのである。

翌日、浩一は心ならずも一回目の授業をさぼるハメになった、英語の講義に初めて出席した。
まだ時間までにはかなり余裕があったが、すでに百人あまりの生徒が、定員二四〇名の大教室の好き勝手な場所に座っている。浩一も、教室の真ん中あたりに座って、手持ちぶさたにテキストをぱらぱらめくっていた。
昨日のことがあったので、少し早めに出てきたのだが、少しばかり早すぎたようだった。今度は待ちくたびれて、授業中眠くなりそうな予感がする。
それでも、五分前には教室は満席となり、やがて、ざわついていた教室内が水を打ったように静まり、講師が入ってきたらしいことがわかった。
浩一は、顔をあげることもせず、頬杖をついたままだ。
「皆さん、おはようございます。では、昨日の続きから」
意外に若々しい声が、スピーカーを通して教室中に響いた。
「テキストの二四ページを開いて」

昨日だけで、もうそんなに進んだのかと、浩一はすでに出遅れてしまった憂鬱さに、うんざりとテキストを開いて顔をあげた。

「あっ!?」

思わずあげた声に、浩一のまわりに座っていた生徒達が不審げに振り返った。

教壇に立って、小さなマイクを持っている講師は、昨日浩一とぶつかった青年だったのだ。てっきり、同じ学生だと思っていた彼は、やはり教壇に立っていても、向かい合っている学生たちと同じくらいに見える。

幸い、浩一の声に気づいたのは周囲の数人だけで、講師の彼は浩一には気がつかなかったようだ。

この有名な予備校の講師をしているからには、大学を卒業していることは間違いないだろう。少なくとも二三、四にはなっているはずだ。しかし、どう見ても二〇歳を過ぎているようには見えなかった。

ふっと、彼が浩一の方を見つめたような気がした。

気がついたのか、と浩一がドキンとした瞬間、その視線は自然に教室内にめぐらされた。はぐらかされたような拍子抜けの気分を味わいながら、浩一は彼に見られたと思ったときに感じた胸の高鳴りに、内心狼狽していた。顔が赤くなっているような気がする。

「なあ、このセンセなんて名前？」
隣の生徒に小声でたずねると、その生徒は迷惑そうに眉をしかめながらも「森村」と前を向いたまま、ささやいた。
「森村か……」
受験にさえ出なければ教科書も開きたくないほど、苦手な英語だったが、何となく勉強してもいいような気になっているから不思議だ。しかし、実際は教壇に立つ森村を観察しているに過ぎなかった。
身長は一七〇センチを少し越えたぐらい。これは、昨日ぶつかったときに浩一より一〇センチほど低かったのを覚えていた。少しやせ気味で、ときおり髪をかき上げる指が細くしなやかだ。その髪も、いま流行りのさらさら系というやつだ。
白い開襟シャツとベージュのチノパンが、彼をいっそう学生っぽく見せている。首も肩幅も、胸板も腰も、どこもかしこも細くて、とても成人した男には見えなかった。学生服を着せれば、初々しい新入生でとおるかもしれない。浩一は、その姿を想像するとプッと小さく吹きだした。
「先生。森村センセ！」

浩一は、どっと廊下に繰り出した生徒の群れをかきわけながら、森村に近づいていった。振り返る森村が、一瞬目をしばたたかせ、ああ、と思い出したようにうなずいた。

「昨日は、どうも」

ぺこ、と浩一は頭をさげた。

「君も、この授業を取ってたの？」

「ええ、まあ。昨日は、あれから教室を探してたら遅刻してしまって。結局、今日が初めてです」

「そっか、悪かったね。知ってたら一緒に行ったのに」

すまなさそうな森村に、浩一はかえって悪い事を言ったような気になった。

「あ、いえ、先生のせいじゃありませんから。初日だっていうのに、ギリギリに来た俺が悪いんですよ」

浩一は、我ながら自分のセリフじゃないよな、と内心苦笑する。だいたい、自分より二〇歳は年上の担任さえ、ダチ扱いなのだ、この男は。

いつの間にか、廊下を埋めていた人波が消え、浩一と森村だけが取り残されていた。二限目の授業まで、一時間の昼休みに入ったのだ。

弁当組は、限りある席を求めてサロンや自習ルームへ走り、残りは近くの飲食店へ走っ

ている。
「君は、お弁当？」
「あ、いえ…」
「じゃあ、早く行かないと午後の授業に遅刻することになるよ」
ニッと悪戯っぽく笑った森村に、浩一も苦笑いを浮かべた。
「そうそう遅刻ばかりしてられませんよ。ただでさえ、出遅れてるってゆうのに。森村先生は？　どこか食べに行かれるんですか」
さりげなく誘うつもりでたずねたのに、その思いは見事な空振りだったようだ。
「いや、僕は午後の授業はないからね。すいてからゆっくり行くんだ。じゃ、明日も遅刻しないように」
森村は、そう言いながら片手をあげて階段を下りていった。
「あの、森村先生！」
森村は、階段の途中で立ち止まり、振り返って浩一を見上げた。浩一は、呼び止めてしまったことに自分で驚いて、それから理由を考えた。口ごもる浩一を、森村が首を傾げて見ている。
「あ、あのっ、俺、英語が苦手で、昨日の授業出られなかったし、今日もよくわからなか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erto